

「インタビュー」女優

松原智恵子さん

インタビュー・構成／会報編集・郡司武
写真／水村 孝
協力／東京ガーデンパレス



「新婚旅行ではサハラ砂漠も走りました」

——日活の看板女優だった松原さんのご結婚は当時、話題になり、特に新婚旅行でアフリカに行ったことなどがよく知られています。だいぶ長い旅だったようですね。

松原 私は100日で帰ってきたんですけど、主人はまだ旅を続けてました。もともと主人がシルクロードの本を作るということで行ったんです。ベルギーのアントワープの港でトヨタから2台の車を提供していただいてヨーロッパを回り、スペインのジブラルタル海峡を渡り北アフリカのモロッコ、アルジェリア、チュニジアからイタリアのシチリア島に渡り、トルコのイスタンブールまで来て、私は仕事の関係で日本へ帰りました。私もハンドルを握ったんですよ。

——よく100日も休みがとれましたね。

松原 ほんと、そうですね。ずいぶん前から休みをお願いしてま

仕事を全うしてすうーつと亡くなりたいたい

日活青春映画のヒロインなどを多く演じ、「日活三人娘」と呼ばれた松原智恵子さん。昨年2月、50年連れ添ったジャーナリストの黒木純一郎さんを亡くした。享年80。倒れて1週間後の急な別れに、「看病という時間がなかったのだから、何もさせてもらえなかった」という寂しい気持ちがありますね。銀幕デビューから出会い、新婚旅行、永遠の別れ…を語っていただきました。

——ご主人の黒木純一郎さんを亡くされて1年が経ちましたね。こ

松原 はっきりしないところもあるんですが、倒れて搬送された川

松原 倒れて1週間で亡くなってしまいましたから、まったく予想もしていない出来事でした。80歳でした。

——どこからどんな連絡が入った

松原 はつきりしないところもあるんですが、倒れて搬送された川口の病院から息子に連絡が入ったんです。私はすぐに向かうことができません、息子が駆け付けて、その時は話ができなかったので、息子は、主人と話をしたのですが、その後「疲れてるから寝る」と言ったそ

うです。ですから、大したことはないのかな、と思っていましたら、そのまま、もう2度と目を覚まさずに、1週間後に亡くなってしまいました。

——どうして倒れたんですか。

松原 それがよくわからないんです。「何が原因かわからない」と医師に言われました。尊厳死協会に入っていましたから、「無理な延命措置を本人は望んでいない」ということを息子が医師に伝えました。

——急なお別れになりました。その後、お気持ちはどのように変わっていききましたか。

松原 先日、一周忌を終えました。が、いまだに帰ってくるような気がしてなりません。

したから。

——その後も外国には相当行かれていますよね。

松原 ええ。主人や家族と40数か国は行ってます。冬休みに行くことが多かったですね。

——特に印象に残っている国はどこですか。

松原 ヨーロッパが好きで、中でも一番好きなのはイタリアです。ローマとかミラノがいいですよ。教会もいい。「世界遺産」という本を見て、「わあ、こんなところがあるんだ」と知り、昔の人が作ったところに行ってみてみたい。ヨーロッパが主ですけど、北アフリカもいいですね。知らないところがいっぱいありますから。

——「世界遺産めぐり」みたいですかね？

松原 まあ、そんなところですか。——ご主人からも誘われるんですか。

松原 いえ。私が一緒に行きたいから、一生懸命スケジュールを組んで……。」「ここはどう？」って

主人に言うんです。

——失礼ですが、イメージとは違って、ワイルドであり、積極的なんですね。

松原 そうですね。いろんなところを見てみたい、好奇心からですね。この世界に入る前は、世界を飛び回れるスチュワーデスになるのが夢でした。

「看病させてもらえなかった寂しさというか……」

——そうでしたか。女優さんになられたきっかけも好奇心からのようですね。

松原 名古屋に住んでいましたが、東京に行きたくて。高校生の時に日活の「ミス16歳コンテスト」に応募したんです。1960年でした。副賞が東京見学で「ワァ、いいな」と思って応募しました。その中日活の撮影所見学もあって、そこでスカウトされたんです。

——黒木さんとの出会いは、その後の取材ですか。

松原 週刊現代の密着取材でした。何日間かずっと一緒になんです。

松原 倒れて亡くなるまで1週間。看病というものを全くしていないんです。「看病してその後に亡くなる」ということが、ごく当たり前だと思ひ込んでいましたので、その看病の時間が無かったことで「何もさせてもらえなかった」という寂しさというか、そんな気持ち強いんですね。

「主人と同じ気持ちで2人で入会しました」

——尊厳死協会には14年前にご夫妻で入会していますね。お二人でどんな話し合いがあったんですか。

松原 主人のほうから話がありました。名古屋に住んでいました私の母は、転んで足の骨を折り、入院したら立ち上がれなくなつて、

ずーっと胃に直接チューブで栄養を入れていたんです。胃ろうですね。その後、足が壊疽したりしましたのを見ていました。90歳で老衰で亡くなったんですが、主人から尊厳死協会の話が出ました時、

「ああ、母のああいふ状態を回避するための入会なんだな」と思いました。入会については私も、主人と同じ気持ちでした。2人でそんなに詳しく話したわけではありませんが、そういう状態になった時には「過剰な延命治療はしない」ということにしようね」と話し合つて、2人一緒に入会しました。——お父さんはだいぶ前に亡くされてますね。

松原 私が17歳の時でした。伊勢湾台風の後3年後の1962年の

『看病してその後に亡くなる』という

ことが、当たり前前だと思ひ込んで

そんな気持ちが強いです



『疲れてるから寝る』と言って、そのまま、もう2度と目を覚まさずに亡くなってしまいました

——密着取材されたわけですね。

松原 そうなんです。その頃忙しかったから、日活撮影所だけではなくテレビ局にも密着取材されました。その後も着物の宣伝の撮影の仕事が何年か続いて、食事をこ

馳走していただいたりしました。私が27歳、主人は31歳で結婚しました。

——ご結婚されて50年での突然の死別ということになりました。喪失感はあるものでしょうね。

台風の事故でした。

——日活に入社して2年目ですか。不動産や旅館、銭湯などを経営されていたようですね。

松原 旅館は今はいませんが、そうなんです。

「撮影現場が好きなんです。活力にもなりますし」

——今、ご自身の健康に気を使っておられることはありますか。

松原 昔から、バランスよい食事をとることは心がけていますね。

——運動は何かされていますか。
松原 以前、カーブス（女性専用のフィットネスクラブ）に通っていましたが、あまり行かなくなり止めました。それから歩くことを心がけています。

——若い女優さんとかタレントの方との付き合いは多いんですか。

松原 そんなに多くはないですが、ドラマで共演した、いしのようこちゃんと藤ヶ谷太輔君とは時々、食事に行ったりしています。

——若い人との交流は活力にもなりますよね。日活で活躍していた

女優さんとの付き合いも続いているんですか。

松原 日活の女優さんたちとの集まりが去年、あったんです。コロナなどもあり、久しぶりでした。10人くらいいらっしやいました。——「日活三人娘」と言われた吉永小百合さんとか泉雅子さんも来られたんですか。

松原 和泉雅子さんはいらしたんですけど、小百合ちゃんは来られなかったです。日活OG会ですね。会には笹森礼子さん、香月美奈子さん、清水まゆみさん、芦川いづみさん、伊藤るり子さんもいらっしやいました。

——懐かしいお名前ですね。まさに日活黄金時代。

松原 さんはアンチエイジングには否定的とお聞きしますけれど。

松原 はい、そうですね。もう年齢が年齢ですから、自然に任せます。

——役者に関しては「生涯現役でいたい」とおっしゃってますね。

松原 撮影現場が好きなんです。現場に出ていると何よりも楽しい

ですし、自分自身の活力にもなりません。

「何でも聞けば答えてくれるという人でした」

——ご一緒に旅をし、ご一緒に歩

んでこられたご主人が亡くなられて、ほんとに寂しい食卓になりましたね。

松原 ほんと、そうです。だいたいい、何でも聞けば答えてくれるという人でした。わからないことが

これから、安全で長期滞在できるように旅をしたいね、と2人で話し合っていました



まつばら・ちえこ

1945年、岐阜県で生まれ、名古屋で育つ。1960年、高校生の時に日活の「ミス16歳コンテスト」に入賞し、その後デビュー。青春映画のヒロイン役などを多く演じ、吉永小百合、和泉雅子と「日活三人娘」と呼ばれた。1972年、「週刊現代」などに執筆するジャーナリストの黒木純一郎さんと結婚。新婚旅行でヨーロッパ、北アフリカなどに長期滞在。39歳で長男を出産。2016年、「ゆずの葉ゆれて」で第1回ソチ国際映画祭の主演女優賞。2022年2月、50年連れ添った黒木さんが急逝。

あれば何でも聞いてました。

——今となつては詮無いことではあります、お二人でどのような老後をお考えでしたか。

松原 これからは、もう少しゆったりできる、安全で長期滞在できるように旅をしたいね、と話していました。候補としてはハワイとかですね。

今思うと、ちょっと寝て、起きて、じゃあ旅に行こうか、という感じでの最期だったんじゃないかと思います。瀬戸内寂聴さんが亡くなられて連載の仕事が終わり、本にする手はずも一段落したというところもあり、どっと疲れが出たのかなあ、と思ったりしますね。

——旅のほかに話されていたことは？

松原 家建て替えて10年くらいになるんですが、部屋をリフォームしようとして2人で話してました。主人は、仕事を全うしてすうーっと亡くなったので、私自身も、そのような最期にできたらいいな、と思っています。

——今日は、まだお辛いなかでのインタビューとなりました。お忙しいところ、ありがとうございます。

インタビューを終えて

「最期はポックリ逝きたい」というのが多くの人の思いのようですが、残された家族にとつては、松原さんの語る「看病する時間もなく、何もさせてもらえなかった、という寂しい気持ちが残る」ものなのかもしれません。長い看病の果てになのか、ポックリなのか、「ほどほどに」と言うけれど、それはどれほどなのか？「最期のそれぞれのリアル」を思ったインタビューとなりました。